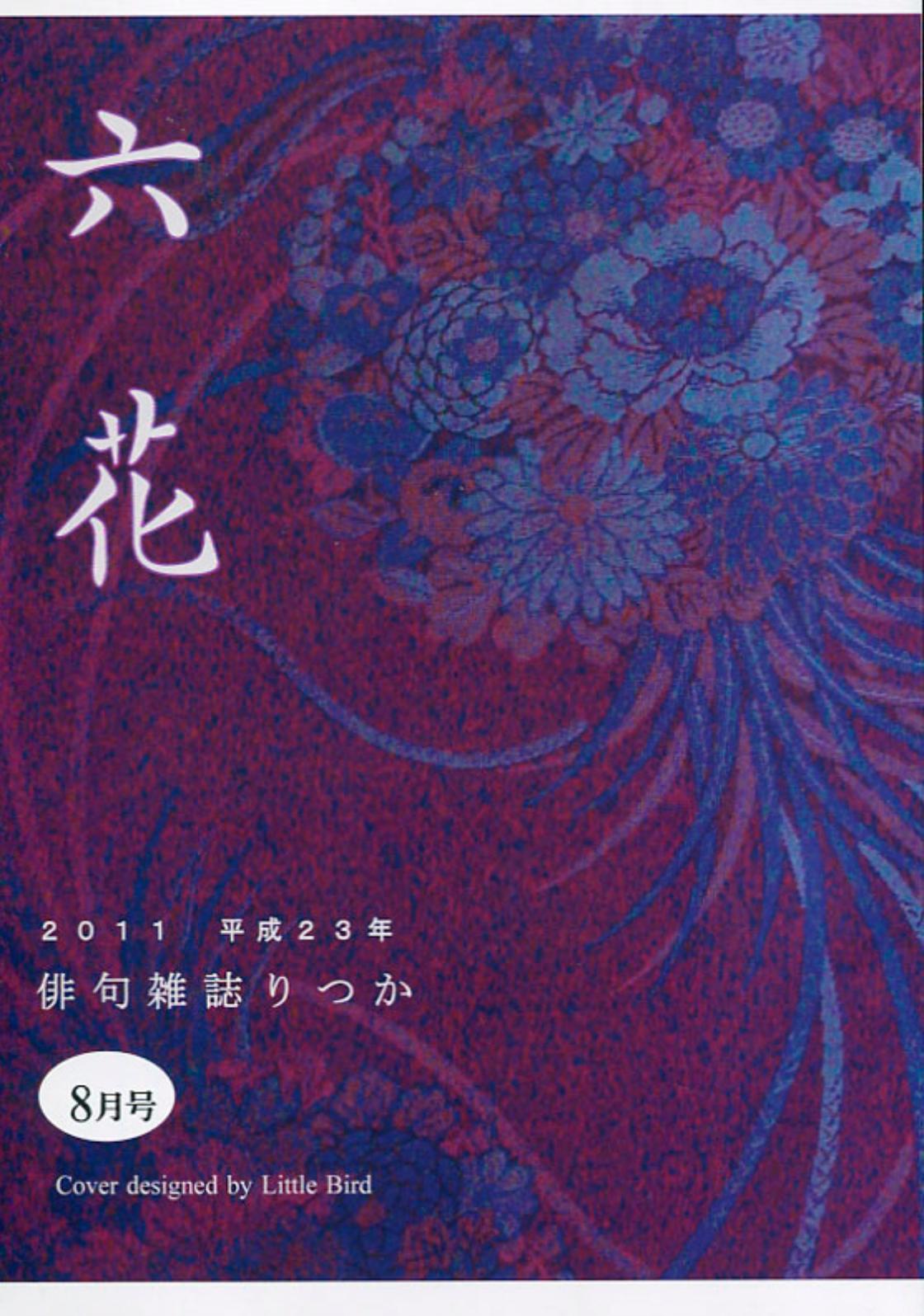


# 六 花



2011 平成23年  
俳句雑誌りつか

8月号

Cover designed by Little Bird

水<sup>みず</sup>占<sup>うら</sup>に浮き上がり来る蝶螭かな

桐の実の朝に尖り始めたる

昼顔に漁網の端のかかりをり

遠船へ<sup>やだけ</sup>箭のごとく大夕立

朝涼や腹をぬらしてゐたる犬

熊胆<sup>くまのい</sup>に白湯を沸かせる土用凧

傾けてこぼして積めるかき氷

滝壺に水色に水もどりけり

蟬の殻草の穂先の先知らず

枝先に空蝉上り詰めぬたる

萍の陰にめだかの目が光る

目高の子数へても増えて来ず

蝸に風は殺されゐたるかな

風死すと風呂に出かける漢かな

蝉しぐれ 伯ほう耆き大だい山せん隠しけり

梅雨明けのあつけらかんと雲のあり

嶺嶺に雲を退け梅雨明くる

あめんぼう斜め走りに遡る

# 瀧落ちて草の姿も色も消す

蟻

蜂

たきおちてくさのすがたもいろもけす

ぎほう

岸の子の両手広げて瀧を見る

瀧を飲むポーズにさせて写真撮る

沸くやうに飛沫しぶきの出づる瀧の上

強き風起こして瀧のおちにけり

瀧に育っていた草が瀧の勢いでなぎ倒されて消え、その色も瀧水によつて掻き消されているよ。というのである。落下する白い瀧水の中に微かに草だと認識は出来るのだが、作品の中では「その草の姿も色も消されている」という断定の表現は詩の世界でこそ可能。主観を強く打ち出している主観ではあるが写生だから「消す」と断定したこと、句の強さが出た。これを「消えたように見える」などと言ったのでは弱くて発句を源にしている俳句にはならない。もつとも、草の姿か色かどちらかに絞ればもつと佳くなるが、しつかり断定表現したことを高く評価した。

# 風吹けば光の動く柿若葉

小寺ふく子

かぜふけばひかりのうごくかきわかば こてらふくこ

若葉風葉裏返して流れ行く

老鶯の木々を渡れる空青し

青葉して山近くなる峽<sup>か</sup>の村

雲一つなき夏空にとびの舞ふ

風が吹いたらと当然柿の若葉が動くと言うのが自然の倣い。だがその常識を裏切って、柿の若葉を光にすり替えて「光の動く」（光が動く）と意外なことを言った。これこそ俳句の醍醐味である意外性。このような意外性のことをさりとしまし、しかも大胆に言つてのけたのが優れている。これ以上説明の必要がないくらい、実に鮮明に読者の眼裏（まなうら）に柿若葉が光となつて輝き再現されてくるのではないか。技術的には「光の動く」という個所の表現方法にも少し工夫をしたり推敲も出来るが、若葉が光に替わつたいう意外性を買つて夢風撰に推薦した。

雪 卿 集

椎の花

笹村 政子

風に解け風に崩れず白牡丹  
葉桜の風音変はるたび光る  
緑風や仏足石に雨雫  
花椎の匂ひ降りくる阿弥陀堂  
雨去つて山ごと匂ふ椎の花

花片

松本文一郎

花片の意志ある如く流れ寄る  
春宵や異人の墓地の白き月  
鯁樽塩の噴きたる重石かな  
雪柳ひと靡きして風を生む  
齧撮のごとくに鷺や花の池  
木の芽風鳥を探せる聖跡地

7月分補遺

せつじゆしゆう  
雪樹集

初夏

筒井八重子

幼子の手を振り返すこどもの日  
こどもの日父懸命に子につくす  
初夏の山萌黄色にと煌めきぬ  
鯉幟ほどよき風に乗りにけり  
ケイブルに並ぶ人波こどもの日

芽柳

志方章子

芽柳やふんはり嬰の髪を梳く  
制服に手の隠れをり入園児  
白蛇のごとくしなれる雪柳  
庭咲きのチューリップもて子を見舞ふ  
囀に心いつとき明け渡す

# 螢雪譚 六甲

蟻地獄見事な居留守使いおり 貝森 光洋

掲句は蟻地獄が見事な居留守を使った騙しの手口を詠んだ。居留守とは家に居るのに不在をよそおうことで「誰もいませんよ、何もありませんよ」と罠に誘い込むのである。蟻地獄とは、薄羽蜻蛉(ウスバカゲロウ)の幼虫が縁の下などの乾いた土砂に造る罠。すり鉢状の穴を掘って隠れ、すべり落ちた昆虫を捕食する。別名「すり鉢むし」ともいう。皮肉にも殺生を嫌う神社仏閣の縁の下などによく見かける。地獄と極楽が当に背中合わせの紙一重。俳人が好んで題材にする所以か。同時作「人間は捧であり葦であり」は、哲学者・パスカルが随想録『パンセ』で述べた「人間は考える葦である」という有名な一節と対句表現。萍は根無し草とも呼ばれ流離や流浪をも示唆。「蠅叩き構えて蠅をロッキイン」ロッキオンとは、銃やクロスボウや吹き矢などで、照準に目標を捉えることや、射撃管制装置やミサイル

目標追尾機構で、敵を捕捉すること。転じてコンピュータゲームなどにおけるシューティングゲーム(射的)やアクションゲームにおいて、目標を定めるまたは自動追尾することを指し、その機能をロックオン機能という(「ウイキペディア」)。引用が長くなった、蠅叩きで狙った段階で蠅を叩いたも同然であるという変な自信が微笑ましい。「ビルの谷間夕焼けの矢が飛んで来る」この句も夕焼けの一条の光りがビルの谷間に差し込んでくることを矢になぞらえている。「ニュートンの法則違反糸とんぼ」も糸とんぼの生態を頭の中で物理的に処理している。読者としてはこの先に趣も欲しくなるのである。(以下略)

# 六花集

風吹けば光の動く柿若葉  
若葉の裏返して流れ行く  
老鶯の木々を渡る空青しく  
青葉の山近くなる峡の村  
雲一つ無き夏空にとびの舞ふ

潮の香の吹き上げてくる立夏かな  
つづじ山咲き満ちて海平らかに  
溪流若葉川底の石ゆらぎたる  
夙川しゆくがわの幅を狭しと鯉  
父と夫命日同じ薔薇を切る

葉桜の山の樹となりけり  
石積みの島の段々麦の秋  
白鷺の胸よりの歩む青嵐  
みつめをれば吾もものふ武者人  
石橋のやまろみたる燕子花

小寺ふく子

平居 濤子

藤生 昇三